カラクリ、銃床、銃身：火縄銃の製作

火縄銃の製造は、複数の熟練工の仕事であった。銃身を鍛える鍛冶屋、銃床を彫る木工屋、そしてカラクリを作り組み立てる技師である。
日本では 1540 年代まで銃器は知られていなかったが、すでに金属加工やからくり人形の製作に長けた職人が何人もいた。種子島の刀匠は、ヨーロッパのマスケット銃 2 丁を手本に、1 年足らずでその技術を再現した。1550 年代までには、各地の鉄砲鋳造所で何百という火縄銃が生産されるようになった。

火縄銃の銃身の鍛造

日本製火縄銃の銃身は、まず錬鉄の板をマンドレルと呼ばれる焼き入れした鉄の棒に巻きつけ、継ぎ目のない筒状に鍛造する。この筒の尾端に鉄製尾柱をねじ込んで密閉し、筒の内部を滑らかで安定させるためにホーニング加工を施す。最後に銃身を銃床にはめ込み、帯金で固定する。さらにからくりやそのプレートを取り付け、真鍮製のピンで固定する。
一般兵が使う火縄銃は、一枚の鉄板から作られたシンプルな銃身である。武士の持つ高級な銃は、銃身に短冊状の金属を巻いて補強した。武士が持つような高級なものは、銃身に帯状の金属を巻いて補強し、その上に武士の刀と同じ玉鋼の焼入れ鋼を二重に巻いたものが最も高価な火縄銃であった。